

みんおん

MIN-ON
Quarterly

第7号

July, 2007

私が心から愛する音楽を
子供たちと分かち合いたい

五嶋みどり

人と音楽——ヴァイオリン奏者 五嶋みどり
ボランティア活動がエネルギーをくれる
楽屋にて——小林公平 宝塚音楽学校校長
「昨日より今日、今日より明日」と、
進歩を続けたい

五嶋みどり ●ヴァイオリン奏者 (Midori Goto)

私が心から愛する音楽を 子供たちと分かち合いたい

——昨年12月、3人の音楽家とともにコミュニティ・エンゲージメント・プログラムをベトナムで行いましたね。

◆**五嶋** 私が設立した非営利団体「ミュージック・シェアリング」の、初めての本格的な海外での活動です。この「コミュニティ・エンゲージメント」とは地域関与という意味ですが、地元の音楽家や訪問先の人々と音楽を通して交流することが一つのねらい。今回は10日ほどの日程で音楽院、山岳少数民族文化を継承するための寄宿芸術学院、さらに盲学校、孤児保護センター、子供村などを訪ねました。演奏するだけでなく、音楽院の学生たちと共演したり、子供たちと個々に触れあうこともできました。双方に得難い経験ができたのではないかと自負しています。本物の音楽に触れる機会の少ない子供たちが、私たちの演奏を聴いて目を輝かせる、その様子は、私たちにもたくさんの喜びを与えてくれました。

——これからアジアでの活動を行っていくそうですね。

◆**五嶋** 次回はカンボジアの予定ですが、まだ詳細は決まっていません。アメリカではコミュニティ・エンゲージメント活動が幅広く行われていますが、アジアのリーダー的存在の日本では、まだそうした活動はあまり広く行われていません。そこで、ミュージック・シェアリングが、若手演奏家を募り、アジアの国々でも活動することにしたのです。とはいえ、今回は初めてでしたので、準備の段階から困難もありました。現地の方々の協力を得ながら、私たちも想像していた以上のことを学びました。

——ミュージック・シェアリングという法人は「みどり教育財団」を発展させたものなんですね。

◆**五嶋** 私が心から愛する本物の生の音楽を、子供たちと分かち合いたい、という気持ちからニューヨークで立ち上げたのが「Midori&Friends」。当時住んでいたニューヨーク市では教育に対する予算削減で、公立学校の音楽



● Profile

1982年、11歳でニューヨーク・フィルとの共演でデビュー。以来指揮者ではバンスタイン、アバド、メータ、小澤、ラトル、ヤンソンス、器楽奏者ではスターン、ズッカーマン、ヨーヨー・マ、オーケストラではベルリン・フィル、ウィーン・フィル、パリ管、コンサート・ヘボウ管をはじめ多くの音楽家との共演を重ね、世界各地で幅広い演奏活動を続けている。

年間約70回の演奏活動に加えてコミュニティ・エンゲージメント（社会活動）にも積極的に取り組み、1992年ニューヨークで非営利団体Midori&Friendsを設立したのを皮切りに、日本ではNPO法人ミュージック・シェアリングを設立、その他目的に合わせてさまざまなプロジェクトを立ち上げたり、団体を組織するなど、日米を中心に活動を展開している。

2004年、南カリフォルニア大学（USC）ソーントン音楽学校の「ハイフェッツ・チェア」(かつてUSCで教鞭をとったハイフェッツの名を冠した教授職)に就任。2006年には学内にコミュニティ・エンゲージメント・センターを開設し、通常のコンサート・ホールの外で人々に音楽を届けたいと考える音楽家たちのリサーチ・トレーニングを後押ししている。

使用楽器はガルネリ・デルジェス「エクス・フーベルマン」(1734年作)で、社団法人林原共済会より終身貸与されている。

CDはソニー・クラシカルよりリリース。趣味は読書、観劇。

公式ホームページ: www.gotomidori.com

の授業数が大幅にカットされ、音楽の専門教師も減らされました。感受性の豊かな子供たちが本物の音楽に触れる機会を失うのは大変残念です。ちょうどその頃、小学校の英語の教科書に私のタングルウッド音楽祭でのエピソードが載って、小学生から「演奏しに来て欲しい」とたくさんの手紙をもらいました。個人的に訪問演奏してもよかったのですが、非営利財団を作り、組織的に活動した方が継続性もあり、活動意義を社会に広めるためにも効果的だと考えて「Midori&Friends」を設立しました。

それが1992年のこと。公立小学校や小児病院などで

本物の音楽に触れる機会の少ない子供たちが、 私たちの演奏を聴いて目を輝かせる

の無料の演奏会を始めました。最初は私のアパートのダイニングをオフィス代わりにしていましたが、同年に東京支部として、「みどり教育財団」を設立し、次第に協力者やスタッフも増えました。社会の需要に即した、より充実したプログラムを提供し、展開していくことを目標に、2002年にミュージック・シェアリングという日本で独立したNPOに業務を受け継ぎ、現在に至っています。音楽教育を研究し、それを実践する人材教育にも力を注いでいます。

ボランティア活動が エネルギーをくれる

——演奏家として世界を駆け巡っている五嶋さん。音楽による社会奉仕活動との両立は大変なのではないですか。

◆五嶋 確かに肉体的にきついと感じることはあります。でもどちらも私にとっては大切なんです。奉仕活動を通じての触れ合いや刺激は、普段のコンサート活動では得られないもの。何よりも子供たちから大きなエネルギーをもらっています。演奏家としての活動が充実しているからこそ、奉仕活動ができ、微力ながらも社会的貢献ができるのだと思っています。

——天才少女から大人の演奏家へと変わる時期には、ヴァイオリンを止めようと思ったこともあったか。

◆五嶋 ヴァイオリンを弾くことに何の疑問も持たずに大きくなりました。自分が選択したわけでもないのに、気が付いたら人前で演奏していたのです。それで深く悩み、活動を休止したことがありました。もともと読書が好きで、その当時興味のあった美術史を勉強したいと思い、一般の大学に入ることにしました。そのうちに興味の対象が心理学となり、本格的に勉強するようになりました。そんな風にヴァイオリンから離れてみると、すべてのことが音楽やヴァイオリン演奏にもつながっていることがわかったんです。いろんな勉強をすることで、自分にとって音楽活動が重要な意味を持つことがわかり、大学を卒業する頃になって初めてこれからもプロのヴァイオリニストとして活動していこうという決意が固まりました。

——お母さまの支えも大きかったのですよね。

◆五嶋 子供のためになることなら、全精力を注いでくれる母です。弟の龍に対しても同じです。3人で暮らしていた時期も長かったですが、今、弟はヴァイオリンの演奏活動と並行してポストンで大学生活を満喫し、子育てが一段落した母は「これからは自分の好きなことをする」と言っています。私はロサンゼルスの本拠にして、大学での後進の指導と演奏活動ですから、3人は離ればなれですが、お互いに電話をしあって、今でもいろんなことを話しています。ゴシップ話に花を咲かせることもあるんですよ。

——今年は日本での活動が目立ちますね。

◆五嶋 北海道のKitaraホールの開館10周年と、大阪のザ・シンフォニーホールの開館25周年の記念コンサート・シリーズで演奏させていただきました。どちらも思い出深いホールなので、記念の年に演奏できて嬉しかったです。

——新しいアルバムのリリースは、ちょっとご無沙汰ですね。

◆五嶋 録音が済んでいるものが結構あるんですが、私が忙しくて編集作業に立ち会えないために、リリースが遅れているんです。もうちょっとだけ、待ってくださいね。



ハノイ市ゲン・ディ・テック音楽学校にて(2006年12月26日)
(撮影:小田哲明)

●ベトナムでのコミュニティ・エンゲージメント・プログラムは、ミュージック・シェアリング(理事長:五嶋みどり)の主催、ANAの協賛、民音の助成で開催。本年6月8日、民音音楽博物館古典ピアノ室で、プレス向けの滞国報告会が開催された。このインタビューは、6月5日に行われた。五嶋みどりのホームページでも、ベトナムでの模様をご覧いただけます。

World View 外交官に聞く ⑥

リヴァ・ラバリウエラ

Mr. Liva RABARIHOELA

●マダガスカル大使館 文化・儀典書記官

——インド洋の十字路と呼ばれるマダガスカルは、アジア、アラビア、ヨーロッパ、アフリカなどあらゆる文化が溶け合う国と伺っております。マダガスカルの特徴と魅力についてお聞かせください。

◆ラバリウエラ書記官 マダガスカルは日本と同じ島国です。日本より大きい島の中に1700万人の人々が広々と住んでいます。私たちの最も大切な宝は、大きく二つに分けると多様な「自然」とそこに住む多様な「人間」です。マダガスカルは「インド洋の十字路」と言われるように、多様な文化が築かれています。豊かな自然は私たちの誇りであり、そのエコロジーを大切にしています。島の西には世界遺産に指定されている「ツインギー」と呼ばれる石灰岩が侵食され鋭く削られた岩の景観を見ることが出来ます。また数多くの森林公園や国立公園があり、豊富な自然とともにシロクロエリマキやアイアイと呼ばれるキツネザルをはじめ、マダガスカル以外では見られない動植物も沢山生息しています。しかし残念なことに、近年それらの動植物たちも生息の危機に陥っていますので、政府としては、動植物を守るために保護地域を指定し、環境保護につとめています。マダガスカル人の起源がどこであるかは明確ではありませんが、3世紀から4世紀にかけてインドネシアからの移民がマダガスカル人の起源というのが定説となっています。その後、アラブ、アフリカからの移民が入ってきたのではないかとされています。多様な人種・文化で構成されているにもかかわらず、「マダガスカル語」というひとつの言葉でコミュニケーションを図ることができ、それが私たちの誇りでもあります。また大きな特徴として、先祖とのつながりを大切にしているということです。「フィハヴァナナ」という伝統的な社会規範がマダガスカルにはあります。これは、調和・友情・他者を受け入れる寛容の精神を根底とした人生哲学でもあります。この人生哲学の故に、マダガスカル人は、心温かい人々だとよくいわれます。また日本の皆様は大変驚かれるかも知れませんが、マダガ



スカル人は、お米を主食としており、3食ともお米をいただきます。これもインドネシアの影響かもしれません。特に、マダガスカルが、アジアの影響を深く受けていることに驚かれる人が多いですね。こうしたことからマダガスカルは、アジアとアフリカを結ぶ重要なパイプであるといわれます。

——民音では1999年より、「アフリカ音楽紀行」と題して、隔年でエチオピア、ザンビア、モロッコ、セネガルの音楽・舞踊を紹介してきました。今回、マダガスカルがシリーズ5回目として開催されることになり、期待が高まっています。

◆ラバリウエラ書記官 民音が行っているような音楽・舞踊の交流を通して、互いの国を理解するということは大変素晴らしい方法だと思います。日本には沢山のマダガスカル留学生がおりますし、またマダガスカルには多くの日本の技術者の方が、技術指導のために在住しております。しかし残念なことにマダガスカルのことをご存知の日本の方は、まだまだ限られています。そうした中で、民音がこの公演をとおして、わが国の文化を紹介して下さり、また今までアフリカの文化を紹介されてきたイニシアティブは、賞賛に値すると思います。互いが友情を深めることは、非常に重要なことであると思います。8月から始まるマダガスカル公演の成功を、心より期待しております。

「昨日より今日、今日より明日」と、進歩を続けていきたい



小林 公平

(こばやし・こうへい)

●宝塚音楽学校校長

●1928年生まれ。宝塚音楽学校校長・理事長、阪急電鉄株式会社名誉顧問、
作詞家・公文健としても活躍、作品原案も数多く提供している。

★現在、民音音楽博物館で、「華麗なる宝塚歌劇の世界」を開催し、大好評をいただいております。

◆宝塚は、バレエや声楽といった技術的な部分は年々レベルアップしていますが、基本的な理念というものは変わりません。これまでも、これからも変わりません。それが魅力の一つとも言えるのではないのでしょうか。

★これまで、阪急電鉄の社長・会長をはじめ、宝塚歌劇団理事長、千里国際学園理事長、阪急百貨店の会長など、数々の要職を歴任されてきましたが、その原動力はなんですか？

◆好奇心です。出しゃばりとも言えるかもしれないけれど(笑)

作詞を始めたのも、小原弘稔先生おはらひろとしの勧めでしたが、やはり好奇心が動きました。7月に上演される「あさきゆめみし」でも2曲ひかる(「光の君よ」「あゝ 紫よ」)を作詞していますが、とにかく新しい事に飛び込んでいきたい気持ちが強いです。そして、いつも「これは何だろう、これは何故なのか」という気持ちで物事に接しているせいかもしれません。

★現在は宝塚音楽学校校長としてご活躍ですが、その醍醐味を教えてくださいませんか。

◆2年間の教育で、よくここまで成長してくれたな、と感じられる事ですね。会社の仕事でも同じように、社員が力をつけるということはありませんが、特に芸術の世界は、成長の結果が目に見えますから、それが醍醐味です。立派に育った生徒達に、卒業証書を手渡す瞬間は、なんともいえず嬉しいものです。

それから、宝塚の生徒達には、他にはない同期の絆の強さがあります。私も海軍兵学校出身で、同期の絆は強いのですが、生徒達の絆はうらやましいくらいです。

★一人ひとりの生徒さんを大事にされているんですね。

◆音楽学校を通じて、「がんばろう!」「やればできる!」という気持ち、力を持ってほしいと思っているんです。卒業した後、退団した後の、次の人生のためにもなりますから。

若い世代の方の中には、目的の見えない方も多いようです。もちろん、その年代で人生を決めるというのは大変なことでしょうけれども、社会にあっても、音楽学校にあっても、何か一つ「こうしたい!」という気持ちが必要でしょうね。

音楽学校を受験する場合にも言えます。特別なレッスンを受けたことがなくても、一途な気持ちがある方の芽をつぶしたくないのです。音楽学校を卒業後は、スターを目指して向上心を燃やして更に意欲的に取り組む生徒もいます。退団後に大学に入り、歯科医師になった生徒もいます。やはり、「昨日より今日、今日より明日」と進歩を続けていくことが、人生において大切だと思うのです。

コラード&コラードとマルムショー —— (スクエア・ピアノ)

民音音楽博物館では、2階の古典ピアノ室で歴史的な2台のチェンバロ、6台の古典ピアノ、2台のスクエア・ピアノ、3台のモダン・ピアノ、5台の自動演奏ピアノを一般公開しており、毎日、1時間に1回ずつ(20分程度)計5回紹介・実演しております。(日曜・祝日は計7回。月曜の休館日を除く。入場無料)

●スクエア・ピアノ(箱型ピアノ) 打弦鍵盤楽器。平らな長方形箱型のピアノ。直接の起源はクラヴィコードであり、同じ形をしている。スクエア・ピアノは、19世紀には最も一般的な家庭向き鍵盤楽器であったが、やがてすべてによりすぐれたアップライト・ピアノに取って代わられた。



◀コラード&コラード

Square Piano "Collard & Collard" (London)

イギリス・ロンドン製

1848年製作

クレメンティとコラードの合資会社が製作したスクエア・ピアノ。この時期は、ピアノの革新期で、製作者、ピアニスト、作曲家等が理想のピアノを追求した時代でした。

<サイズ> 全長: 182cm, 幅: 74cm, 高さ: 92cm

<鍵盤> 75鍵 <音域> F1~g4

マルムショー ▶

Square Piano "Malmsjö"

スウェーデン・エーテポリ製

1862年製作

18世紀~19世紀にかけて、ヨーロッパ(ドイツ、イタリアなど)で流行した箱型ピアノ。アップライトの製作により、やがて製作されなくなりました。

当時は、エーテポリのグランド・スクエア・ピアノと称される名器です。

<サイズ> 全長: 195cm, 幅: 95cm, 高さ: 101cm

<鍵盤> 82鍵 <音域> C2~a4



スクエア・ピアノの盛衰

スクエア・ピアノは、箱型のピアノです。スクエア・ピアノが、ピアノの歴史のなかで、どんな地位をしめ、やがてアップライト・ピアノに取って代わられたのでしょうか。

ピアノは、1709年イタリアのクリストフォリによって発明されました。チェンバロが音の強弱が表現できないことから、ピアノ(弱音)も、フォルテ(強音)も出せる「クラヴィチェンバロ」(gravicembalo col piano e forte)が、最初のピアノの名前でした。

ピアノは、当然のように、高音は弦が短く、低音が弦が長くなることから、形は、翼(フリューゲルFlügel)の形になります。いわゆるグランド・ピアノです。当時のピアノは、大変高価でピアノ1台で、豪邸が何軒も購入できたと言われていました。

そこで、ピアノ音楽を普及させるためにもっと安価なピアノを作りたいと発明されたのが、スクエア・ピアノです。このテーブル

型(箱型)のピアノは、ピアノ弦を交差弦にし、鉄製フレームを用いています。

ウィーン式のあくまで木だけの構造にこだわるフォルテピアノから新しい一歩を踏み出し、大衆化に大きな役割を果たしました。1770年代の末には、イギリスのツンベの型のスクエア・ピアノが何百台と作られました。

ドイツからアメリカに渡ったシュタインヴェークは、スタインウェイと名を改め、1853年にスタインウェイ&サンズを創立します。2年後、ニューヨークで開かれた博覧会に総鉄骨フレーム・交差弦のスクエア・ピアノを出品、金メダルを受賞します。1860年代末には、全ピアノの90%がスクエア・ピアノでした。やがて場所も取らない優れたアップライト・ピアノが発明され、1890年代にはスクエア・ピアノは姿を消していきました。

「後期ロマン派」—— リストとワーグナー

音楽評論家 石田 一志
くらしき作陽大学音楽学部 学部長・教授

リストが創始した交響詩は特定の対象の具体的な描写というよりも、もっと昇華された詩的な表現であり、ワーグナーの総合芸術作品の思想にも連なっている。

フランスに二月革命が起きた1848年は、歴史における19世紀の分岐点です。文学史や美術史ではロマン主義からリアリズムへの転換があります。音楽史の場合は、この年以降に起きた諸変化によってロマン主義は新しい生命を獲得します。それを新ロマン派とか後期ロマン派と呼びます。感性の直接的な表現を重視したこれまでの創作とは異なって、歴史主義的な傾向が強まるのが特徴です。

その結果、未来志向の革新的傾向、保守的な擬古典主義、そして国民楽派にみられるような民族的ルーツを強調するナショナリズムの音楽などが誕生しました。革新的な傾向では、フランツ・リスト(1811~1886)の「交響詩」とリヒャルト・ワーグナー(1813~1883)の「楽劇」が重要で、大きな影響力を發揮しました。

ピアノのヴィルトゥオーゾとしてヨーロッパ各地で華やかに活躍したリストが、その活動に終止符を打ち、後半生をはじめたのが1848年です。ワイマールの宮廷楽長に就任したリストは、自分のオーケストラを使ってさまざまな実験を行い、交響詩と標題交響曲の新しい理念を表現しました。交響詩は、文学や絵画などを題材とする自由な形式の単一楽章制の標題楽で、リストは13曲作曲しました。

《タンホイザー》や《ローエングリン》などでドイツ・ロマン主義オペラを絶頂に導いたワーグナーは、1849年のドレスデン革命に加担して、国外追放の身となります。この事件以降がワーグナーの後半生で、「総合芸術作品」の理念のもとに「楽劇」の形式を創造しました。「総合芸術作品」とは筋書き、詩、音楽、舞台装置、衣裳、所作が渾然一体となって融合した芸術ということで、その理念の実現のためにワーグナーは音楽だけでなく、台本も舞台の指示も自分で書きました。具体的に力点を置いたのは、



劇と音楽の密接な関係で、そのために一幕に中絶なしの音楽を与え(「無限旋律」)、また登場人物や重要な事物や観念などに固有の音楽的動機(「示導動機」)を当てて、その展開と対位的な組み合わせによって全曲に統一性と構築性を与えました。この理念にたった大作が《ニーベルングの指環》です。

リストの交響詩、ワーグナーの楽劇は、いずれもポスト・ベートーヴェンの音楽の可能性を美学的に考えたもので、ベートーヴェンがその「第九」で、交響曲と言葉を持ち込んだことを念頭に、音楽と詩との結合、音楽と演劇との結合を目指しました。

こうした音楽の表出性を重視する立場に対して、ヨハネス・ブラームス(1833~1897)に代表される古典的な形式による絶対音楽を書く擬古典主義者も出てきたのです。

世界の歴史	<ul style="list-style-type: none"> 1762 英国で産業革命 1776 アメリカ独立宣言 1804 ナポレオンが皇帝に 1812 ナポレオンのロシア遠征 1815 ワーテルローの戦い 1840 アヘン戦争 1853 クリミア戦争
作曲家生没年表	<p>リスト(1811~1886)</p> <p>ワーグナー(1813~1883)</p> <p>ヴェルディ(1813~1901)</p> <p>ブルックナー(1824~1890)</p> <p>ブラームス(1833~1897)</p> <p>チャイコフスキー(1840~1893)</p> <p>モーツァルト(1756~1791)</p> <p>ベートーヴェン(1770~1827)</p> <p>ウェーバー(1786~1826)</p> <p>ロッシニ(1792~1868)</p> <p>シューベルト(1797~1828)</p> <p>ベルリオーズ(1803~1869)</p> <p>メンデルスゾーン(1809~1847)</p> <p>ショパン(1810~1849)</p> <p>シューマン(1810~1856)</p> <p>ハイデン(1732~1809)</p> <p>マラー(1860~1911)</p>
時代	<p>1700 1750 1800 1900</p> <p>バロック時代 古典・ロマン派時代 現代</p> <p>1830-1848 1848-1910</p> <p>前期ロマン派 後期ロマン派</p>
音楽の潮流	<ul style="list-style-type: none"> 1709 ピアノの発明 公開演奏会の発達 音楽が一般市民に広がる フォルテピアノの発達(音域の拡大) チェンバロに代わってピアノが盛んになる 1853 スタインウェイ社の創立 オーケストラの編成が確立

似顔絵イラスト：小澤 一雄



民音音楽博物館特別展
華麗なる宝塚歌劇の世界
—「モン・パリ」初演80周年記念—

期間：2007年4月23日(月)～7月22日(日)
会場：民音音楽博物館・2F展示フロア

- 「私は、昭和18年に宝塚音楽学校に入り、戦争をはさんで昭和34年まで宝塚にいました。自分が出ていた公演のポスターもあり、また展示品のひとつひとつが懐かしくもあり、思わず宝塚時代を思い出して感動いたしました。
(80代 女性)
- 「宝塚の展示を見て、青春を思い出しました」
(60代 女性)
- 「宝塚は初めて見ましたが、小林一三という素晴らしい人がいて出来たんだと改めて感激しました。このような素晴らしい企画は本当に勉強にもなるし、生命に刻まれていくものだと思います」
(60代 男性)
- 「今までゆかりがなかった宝塚歌劇団に触れることができ、本当に面白くよい体験ができたと思っています」
(10代 女性)



皆さまの声を
お寄せください。

「みんおんクォーター」
FAX: 03-5362-3411
e-mail: quarterly@min-on.or.jp

Column

「私の一枚」 ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮のレハール「メリー・ウイドウ」

●日本経済新聞社文化部編集委員———池田 卓夫

1950～80年代の世界楽壇に「帝王」として君臨した指揮者、ヘルベルト・フォン・カラヤンを語るのであれば、わざわざオペレッタ(喜歌劇)の全曲盤を挙げようとは思わない。銀行家の亡夫が遺した莫大な財産を相続、パリで優雅に暮らす「陽気な未亡人(メリー・ウイドウ=独語の原題に沿えば「ディー・ルスティゲ・ヴィトヴェ」)」、ハンナ・グラヴァリを歌った英国のソプラノ歌手エリザベス・ハーウッド(1938-90)のことをふと、書いてみたくなったのだ。ハンガリーの軍楽隊長から身を起こし、1905年初演の「メリー・ウイドウ」で大成功を収めたレハールの音楽は流麗にして甘美、哀感にも事欠かず、年季の入った恋人たちの駆け引きを盛り上げる。すべての誤解が解け、ハンナとダニロが往年の愛を取り戻す大詰めでワルツのステップとともに歌われる二重唱「唇は黙し」は「高鳴る調べ」で始まる堀内敏三の日本語詞を通じ、日本で最も有名なクラシック曲の一つともなった。

ロヴロ・フォン・マタチッチ指揮のエリーザベト・シュヴァルツコップ(EMI)、ローベルト・シュトルツ指揮のヒルデ・キューデン(テッカ)ら、カラヤン以前の全曲盤ではドイツ系のソプラノがハンナを歌っていた。カラヤン自身、ウルム、アーヘンなどドイツの地方歌劇場での下積み時代に何度も「メリー・ウイドウ」を指揮した思い出を胸に、当時(1972年)の「ドイツ・グラモフォン」レーベルでは異例のオペレッタ録音を実現させたほどだから、作品を知り抜いていた。その題名役に敢えてドイツ系ではなく、英国人のハーウッドを起用した理由は、音を聴けばすぐわかる。クリームのように柔らかく、暖かな声で聴く者の耳、心を包み込み、とろけるような気分させてくれるのだ。コケティッシュとも、母性的とも、何とも言えない雰囲気。筆者が最初にLP盤を購入した時はまだ高校2年生だったから、大人の女性の濃い色気に圧倒された記憶がある。ちょっとアブナイものに出遭ってしまった場合の、あのドキメキがハーウッドの声にはあった。女性にも目がなかった帝王はハーウッドが品位を保ちながら、優しく悩殺する力を計算していたはず。ブッチーニの「ラ・ボエーム」全曲盤を録音する際には、あだっほいムゼッタを歌わせた。

ハーウッドは52歳で亡くなったが、唯一無二の声と存在感は録音によって、永遠の命を得た。大人になった自分はそのに、薄幸な人だけが放つ儚い光のようなものも感じている。

みんおんクォーター 第7号 2007年 6月25日発行

編集・発行 財団法人 民音音楽協会
〒160-8588 東京都新宿区信濃町8番地
TEL.03-5362-3400 FAX.03-5362-3401
e-mail: quarterly@min-on.or.jp

発行人 小林啓泰

編集・写真 民音広報宣伝部

デザイン・制作 ムートランド株式会社

- 本誌についてのお問い合わせは(財)民音音楽協会みんおんクォーター編集部へ
- 本誌掲載記事および写真の無断転載を禁じます。

表紙/民音音楽博物館古典ピアノ室で開催された帰国報告会終了後の五嶋みどり。

